

# 千葉県A地区 I 地区、 仮設住宅生活者支援活動

LLPまち・コミュニケーション研究会 友田修

城西国際大学福祉総合学部 松下やえ子 森洋子

## 第17回 I 地区仮設住宅訪問 11月22日(火)

訪問者:松下、森、福祉総合学部学生3名(記録:LLPまち・コミ友田)



既に11月半ばというのに冬の気配は無く、青空の中に風力発電の風車がかっきりと見える。I地区仮設住宅の近くには巨大なホームセンターがある。スーパーマーケット、家電、雑貨、クリーニング、軽食、携帯ショップ、銀行ATM、薬局そして介護用品ショップといった構成である。巨大な店内はうんざりするほど移動距離が長い。午後2時の店内は客が疎らで、ほとんどが高齢者だ。一直線に並んだ棚の間にぽつんと背中の曲がったお年寄りが立っている。ひとりのお年寄りが欲しいモノを手に入れる空間としては、圧倒的な物量だ。しかも数年先には粗大ゴミになりそうなモノばかりである。多分、仮設住宅に住む人は既にここで仕入れたモノに囲まれているのだろう。

午後2時30分、集会所に到着。既に松下、森、福祉総合学部の学生3名が会場の準備を済ませていた。

今回は造形活動ではなく茶話会だ。7か月間毎月一回造形活動を共にして、仮設住宅の住人と関係が近づいたように感じたからである。主に独居高齢者エリアに声掛けして廻る。13名の参加である。そのうち男性2名、女性2名が初めての参加であった。男性は独居高齢者エリアの顔

馴染みである。顔馴染みであったが造形活動は敷居が高かったようだ。今回はお茶飲みということで参加となった。女性2名は家族世帯の高齢者である。

茶話会には一人一品持ち寄りということ伝えておいた。リーダー格の女性が一人だけ、手料理を作ってきた。玄人の料理のようで、それを褒めると津波の前は料理で商売をしていたという。その他は参加者の一人が買ってきたお菓子、松下と筆者(友田)の持ち寄り料理で会を始める。参加者は生活支援アドバイザー2名、学生3名、松下、森、筆者を加えて19名である。

大学祭でのイベントが終わり、90才の男性は充実感から脱力感へ移行し、少し元気がない。いっぽう女性陣はにぎやかだ。

初めて参加のいつも威勢が良くちょっと口の悪い男性は、目にも鮮やかなピンクのタートルネックを着ている。また、以前何回か参加してくれた小学生のおばあちゃん(おばあちゃんといってもまだ若い)も始めてだ。もてなす側にまわって下った。

準備は若いおばあちゃん、松下と森、学生、そして今回筆者は手づくりのパンを持参したので、切り分けを担当した。始まるのを待つ人はこれまでの活動に参加した方々だ。

テーブルの上には持ち寄ったお菓子や漬物、果物が並ぶ。昼間なので紙コップにお茶が注がれる。始まりの挨拶がなかなか始まらない。雑談はにぎやかになる。ピンクの男性は女性達の人気者だ。きっと小学生の頃の子供会の風景そのものなのではないだろうか。

果物の皮むきのために湯沸かし室に居る松下と若いおばあちゃんは、作業をしながら話しこんでいる。

松下が乾杯の音頭をとり、あらためて茶話会は始まった。大学祭という共通の体験もあり、楽しい空間だ。男性高齢者の前の食べ物はなかなか減らない。食欲が無さそうである。「おいしいよ。」と言って一口食べてそのままになっているのが物語っている。

今日のメインイベントは、城西国際大学のボアンティアサークル(手話コーラス)の学生二人の手話パフォーマンスだ。それまで皆笑顔で雑談していたが、歌が始まると家族を失くした人の表情がじっと固まったように見えた。

CDラジカセをバックに最近のヒットソングを手話で翻訳し、振り付けて踊る。一寸前に流行ったパラパラのような感じにも見える。

歌の後は手話のレクチャーだ。男性の一人が「シュワ サジュウニ」と駄洒落を言うと、それを皆がからかい家族団欒のような雰囲気である。松下の提案で「トイレに行きたい」「お願いします」の手話を覚える。参加者のリクエストにより「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」「ありがとう」「好き」を学生の指導で練習した。皆、何度も覚えた挨拶を繰り返している。明日からこの仮設住宅の独居エリアで流行しそうである。

手話のミニ教室は思いの外笑いが生れた。皆にとって孫のような学生がたいへん明るく指導したことが大きい。

16時に会を一旦終了したが、「帰っても一人だからなあ」と数人が残る。そこで仮設暮らしの不満が語られた。11月半ばですでに窓の結露が始まっていること、雨ドイがないので雨水が直に地面に浸み込み夏もカビだらけであったこと、電子レンジの使い方がわからない、エアコンも不慣れであるということなど。風の強い海辺の町であるので、震災後プレハブの仮設住宅に住まうようになる前は夏でもエアコンを使うことがなかったというのだ。

また、大学祭の時の元気が出ない90代の男性は津波当時の状況を語った。水がどこまで来たか、どこに捕まったか、テレビの取材が来たことなど。そして自分で運転して来た軽自動車に乗り込んで、ゆっくり去っていった。

会終了後、仮設住宅内を次回のチラシを配布するために歩く。ここで3つの点に気づいた。

一つは、数件の表札に名前がなくなっていることだ。仮設を退去する世帯が徐々に始めているのだ。現時点では割合としては少しいであるが、これから歯が抜けるように空室が増えていくのであろう。生活支援アドバイザーもそのような状況になっていくことで、今後どのような問題が起こるのかを懸念している。

二つ目は年齢の高い高齢者はネット裏の独居高齢者エリアよりもグランド側の家族世帯にいるということだ。そして昼間は一人であることが多いのではないかと推測される。今日の会に初めて参加した二人の女性高齢者はたまたま、血圧測定のために集会所を訪れていた。二人とも90歳前後に見受けられるが、どちらも家族世帯に住まう。家族世帯エリアで戸の中に人影が見えたので声をかけるとやはり80代後半に見られる男性が出てきた。「集会所にお出かけください」と言うと「歩けないからいいよ」と言う。砂利が敷きつめられている敷地である。「そう言わずに」とは言えなかった。車椅子で送迎ができるように、ベニヤ板の木道が必要である。集会所は仮設住宅敷地の一番はずれにあるのだ。

独居高齢者は生活を自立できている高齢者である。自力で行動できる人々である。参加の90歳代の男性は集会所まで自動車を運転してやってくるのだ。家族世帯の高齢者こそ、昼間の時間帯に人との交流が持てずにいるのではないだろうか。

以上二つの状況から考えるに、集会所をもっと開かれた空間にできないものだろうか。炬燵を置いて日中の寄り合い場所にする。生活支援アドバイザーは県の委託を受けた社会福祉法人施設の職員で皆介護のプロである。これほど安心な空間はない。そこで昼寝をしても、テレビを見ても、おやつを食べても、おしゃべりをしてもよいとなると、多少の苦労はしても、歩いてこよとしないだろうか。

アドバイザーが常駐する集会所を「相談のある方」のみが来る場ではなく、相談があってもなくてもいつでも誰もが来たい雰囲気を持つ場にしていくことが求められると思う。

また、空き室の活用は考えられないだろうか。遠方に住む親戚、友人の宿泊を可能にしたり、住民同士の集う場所に転用できないのだろうか。

三つ目は、茶話会の後で聞いた結露が住民を悩ませている話から、あらためて「仮設」とはどのような土地に建っているかを眺めてみて気づいたことである。ここはグラウンドであるため、排水のための処理が成されていない。従って雨水を流す側溝、そこに向けて雨を導く雨樋は無く、砂利に浸透させる方法をとっているが、床下は湿ったスポンジを置いている状態となり、居室の温度が上昇すると室内に湿気となって入ってくるようである。結果、寝床のあたりからカビが発生してしまうことになり、寝たきりのお年寄りにはとっても身体に悪い環境なのだ。ベッドを置いている方は少ない。

これから冬を迎え、ストーブで暖をとることになるが、閉め切った窓の結露と床からの湿気といった二つの湿気対策を施す必要がある。

春を迎えるとそこから1年で仮設利用の期限がとなる。ここで芽生え、育つ新たな人間関係が仮設住宅を退去するとき、大きなプラスとして働くには、住民の中で能動的に人間関係を深める行動が欠かせない。そのための場所の提供は現状の仮設住宅の中で十分に可能であると思われる。

夕暮れ時には珍しく、50代の男性が照明器具のシェードを洗っていた。「今度集会所でやるワークショップのチラシです。」と言って投函すると、「ご苦労さん、あんたたちのやっていることは応援しているよ。」と言ってくれた。「是非参加してください。」と言うと「俺はまだそんな歳じゃないから」「歳は関係ないですが、・・・誰でも」「いや、俺は忙しいんで。なにしろ、夜中2時頃起きて仕事に出て、昼頃から家を治しているんで・・・」と言う。

この方もあと数ヶ月でここを引き払うことになるのだ。湿気なんてあとちょっと我慢すればいい。ここに住むほとんどの家族の目標は、自分の家を治して早くもとの暮らしに戻るることなのである。

ネット裏(単身高齢者ゾーン)は、湿気とも戦っていくことになる。